

子工学を使って、ある遺伝子を破壊（ノックアウト）したときにどうなるか、遺伝子改変動物の作出など、脳を潰さないで記憶・行動・心理分野の研究者などが脳自体を遺伝子、分子レベルで研究できるようになってきている。電気生理学者がだんだん、モノのレベルでの研究分野に近寄ってきている。しかし、モノのほうからは、なかなかそちらの方には近寄れないというのが現在の状況だと思いますね。

○高畑 どうもありがとうございました。

それでは濱口先生、お話をください。

濱口恵俊先生の講演

「文明の衝突」について思うこと、人間文化、12号、p.62、平成14年3月（添付資料5）

○濱口 本日の研究テーマは非常に、確かに魅力的です。進歩主義というものが、これまでの科学の決定的な力を持ったパラダイムであったということは確かなことだと思います。その後継ぎはなにかということになりますと、ただそれを引き継いで行くという意味では決してないだろう。おそらく、廣田先生のお考えからすれば、そういう従来のパラダイムを決定的に変えるというか、パラダイムシフトを考えるということがテーマだったのではないかと思うわけです。

私などは人間、特に社会との関わりにおける人間というものについての研究を、日本人などについてやってきたわけですが、パラダイムシフトを求めて行くとすれば、二つだけ最初に問題点を挙げたいと思います。

一つは、社会の近代化に関して、従来は欧米起源の近代化論というものを、そのまま受け入れてきたわけですが、非動物性のエネルギーと、動物性のエネルギーとの比率というようなものに関して、前者のほうが多くなるというような定義付けなどをそのまま鵜呑みにしていたわけですが、そこでは確かに一つの方向性を持った歴史が展開されることにはなりません。

しかし実際に日本社会などについてみると、発展段階的に次のステップが現れてくるということは、あまり見られない。社会学者の鶴見和子さんも、日本の社会構造の中身を見てみると、そんな欧米型の変化は遂げていないと言います。〈つらら〉モデルと申しまして、1つの層に次の新しい層が付け加わっている。ある段階でそれを横断して見ると、古代も前近代も近代も〈つらら〉状に認めることができる。そういうのが日本の社会変動の形ではないかというようなことを言っております。したがって、そういう場合は、あまりパラダイムシフトを強調することができないのかもしれませんが。

最近では欧米においても、持続的な発展、サステナビリティというようなことが強く言われるようになってきたわけですが、それなどは、ある程度、従来の近代化論の修正的な展開ではないかとも思います。つまり、社会的な進化というものでなく、持続的な発展が眺

められるということです。先ほど佐藤先生は、「なるようになる」ということをおっしゃったわけですが、そういうかたちで変動はある。しかし、進化の方向に向かっているわけでは必ずしもない。そういう見方が出てきたのではないだろうか。

そうしますと、進化の場合は一つの目的に向かって発展して行くということになるわけですが、そういう目的性ではなく、それこそ、「なるようになる」。あるいはドリフトという英語がございますが、ただよって動いて行くというものが持続的発展とも言えるかと思えます。そういう社会変動論に関してのパラダイムシフト問題が、一つあるだろうと思われれます。

もう一つは、今日、梅原先生がおっしゃっていたことですが、デカルトなどの思想にかかわって、主体と客体というものをはっきりと分けて考えて、主体による客体の制御ということが進化につながって行くんだという発想があったかと思うんですが、それが近代化だということでした。しかし、その場合によく考えてみますと、人間存在を主体と客体に分ける、それを対立させて考えて行くというようなロジック、いわゆる dichotomy (二分法) の論理というようなものが、従来、非常に強かったのではなかったかと。

主体・客体だけではなく、たくさん二分法変数が出されています。普遍に対する特殊とか、正統に対する異端、原則に対する現実、理性に対する感情、中心に対する周辺、自立に対する依存というような、常に二分法変数で事実を捉えている。そのどちらがより進んだものであるかというような発想が出ていたのではないかと思われれます。そういう二分法の中で、人間存在に関して言えば、個体としての人間、個人というかたちの人間と、社会という全体のシステムに関するものが対立的に捉えられてきた、それが従来の社会学的なパラダイムであったかと思えます。はたしてそういうことでの的確に捉えられるものかどうなのか。二分法変数は、イエスかノーかという合理的な選択をおこなうというようなときには役に立つのかもしれませんが、実際に人間について、そんな二分法のどちらと決め付けることはできないことがあります。人間の行動は、心理学などではよくやるわけですが、デジタル量で計測し得るような、そんなリニアなものではなく、もっとファジーで柔軟性に富んでいる。だから、人間存在それ自身が一つのカオスであり、あるくゆらぎ>というものを伴っている。そういう、最近のタームで言えば「複雑系」として捉えざるを得ないわけです。そういうときに、二分法の変数がどこまで役に立つ道具なのかということになると、今度は疑問視せざるを得ないかと思えます。

人間存在についての捉え方について申しますと、「人間」という漢字表現、それ自身ごく普通の言葉として、みんな使っているわけですが、これは元来は中国語の言葉で、中国語のレンジャンという言葉そのまま借りてきただけです。レンジャンというのは世間、世の中という意味であって、日本人はそれを中国から受け入れたとき、そういう世間、世の中に住む人という意味で「人間」という表現を使ってきたわけです。

しかし、人間存在と簡単に言ってしまいますけれども、それを欧米的に受け止めれば個人としてのイメージが持たれているわけです。個人というのは主体的にイニシアチブをと

って自己自身の意志決定を実行して行ける人という意味合いを持っています。そういう存在ではなく、人と人との間、としての人間です。先ほど梅原先生がおっしゃいましたように、和辻哲郎が、そういうことをはっきり指摘しております。人と人との間、呼び方すら人間（にんげん）ではなく人間（じんかん）と呼ぶべきだと。和辻哲郎の岩波から出ております『人間（じんかん）としての倫理学』という本があります。みんなそれを人間（にんげん）の学としての倫理学と読んでしまうんですが、そんなのはタイトルとして意味を持たない、倫理学の問題は人間の問題ですから、人間の学ということは当たり前であって、ご本人がおっしゃっていたようではありますが、人間（じんかん）の学としての倫理学なのです。つまり、人と人との間柄というものに根ざして、どういう存在であるかということを考えて行くのが倫理学だと言うわけです。

そういうことから、人と言っても実は、他の人との関わりの中でしか捉えられないはずのものです。だから中国でよく使われたフレーズに、「人間（じんかん）到る所青山あり」というのがありますが、「にんげん至る所」と読んだのでは、全然意味をなしません。世間、世の中の至る所に青山、非常にいいチャンスというか、そういうものがあるんだという意味です。それから、「人間万事塞翁が馬」という言い方もありますが、世間、世の中というのは、一義的に幸せであるとか不幸であるとか決めることができない、あざなえる縄のごとしということではありますが、あれも、「じんかん万事塞翁が馬」と読まなければいけないですね。

和辻哲郎によれば、人という日本語も、人のことをかまうなど言ったときには、自分のことを言っていますし、我、人と共に行かんと言ったときには、他の人のことを言っているし、人はこう言っていると言ったときには世間一般の存在としての人であります。そのように、自であり他であり、かつ世間というか社会そのものとしての人というものが概念として捉えられないといけない。そういう存在は、他の人との関わりにおいて、生物学的に言えばシンバイオシス、相利共生の関係において行動しているということなのです。

これは釈迦に説法のような話ですけれども、人間の細胞の中にあるミトコンドリアというのは本来、発生的に言えば、古いバクテリアが、その進化のプロセスの中で人間の身体の中に入り込んで棲み着いたもので、一つの細胞の中にもものすごい数のミトコンドリアがあるわけですね。それが相利共生をして細胞にとってのエネルギーを供給している。そういうふうに、1個の生物有機体といえども、実はその生命はバクテリアとの相利共生によって支えられているという、そういう厳然たる事実があるわけですから、ましてや人と人との間も同じようなものであるだろうと。私はそういうところから、システム理論的に、人間の関係的存在という意味合いで、それを関係体 (relatum) という概念で説明しようとしているわけです。

これに対して、欧米人が考えるような主体的な行動を積極的に行おうとする、他の人との関係は一時的に押さえてでも、自分自身の意志を非常に強く貫いて行こうというような存在は、relatum に対して individuum (個別体) と名付けています。私はその違いを明ら

かにするような作業をしておりました。ただし、文化論的に決定的に両者が異なるということでは決してない。やはりシステム理論的に言えば、relatum のほうが本来的な形態であって、その一つの特定の形態が individuum であると思っております。

そういうところから、関係体としての人間存在を重んじる考え方を、人間という言葉を一ひっくり返しまして、「間人（かんじん）主義」と名付け、個々の自立性を尊重する考え方を、従来通り「個人主義」という言葉で呼んでいけばいいだろう。そういうことの実証的な研究として5年ほどの間に世界25カ国、約8000人について、どちらの振るまい方、考え方をサポートするかを調査してみましたら、欧米人は従来、個人主義ばかりサポートしてきたと言われておりましたが、それに反して、欧米人のほうが日本人よりも間人主義（contextualism）が、非常に強いという、意外な発見をしたりしております。

パラダイムシフトでは、人間について、どう考えて行けばいいのかということが重要な課題となるわけです。ところで、人間が人間を研究するわけなのですが、研究者は研究対象の人間から離れた高見に立って、研究対象としての人間を上から眺めるのは、実は望ましいことではない。これは、経済学者で、亡くなった村上泰亮氏が言っているのですが、そういう超越論的な立場ではなく、研究する人間も、研究される人間と同等の立場に立って眺めるべきである。ただ自己言及によって他者と、同じ次元に立って自分自身をうまくとらえるという、解釈学的方法を、いかに工夫するかが大切だと、氏は言うわけです。実際の方法論の難しさは、まだまだ解決されていないのではないかと思います。

パラダイムに関して言えば、人間という行動システムをどのように捉えて行くのかという点が、これからの大きな研究課題になってくるのではないかと思います。それからもう一つ、さきほどからも何人かの方がおっしゃいましたが、自分自身の国、社会の問題と、他の社会との関係というものに関しても、どちらかを基準にして考えて行くのではなくて、お互いに相対的な立場で相手を認めて行くというような、寛容な精神が必要ではないかと思うんですが、そちらのほうに関して一つ重要な問題があるので、最後に指摘しておきたいと思います。昨年9月11日、ニューヨークにあった世界貿易センターに、同時テロなるものが生じてビルが崩壊してしまったわけです。アメリカ側は同時テロという言い方で、その張本人とされるアルカイダとかビンラディンなどを追求して行くという姿勢を見せておりますが、これはアメリカの国際政治学者のサミュエル・ハンチントンなどの立場から言わせれば、やはり文明の衝突、The Clash of Civilizations ということでないかと思うわけです。イスラムという言葉自体の意味も、絶対的な神に対する帰依を指す言葉でありますし、そのための懸命の努力がジハードと称されることであって、決して聖戦をおこなったり殉教をするとか、そんな意味は本来ないわけです。そして、イスラム原理主義などという言葉もありますが、これはキリスト教における文字通りの教義尊重を原理主義と名付けたわけで、それを単にイスラムに適用しただけの話であります。

ハンチントンによれば、民族・国家・人種間の争い、これをコミュニケーション戦争と呼んでいるわけですが、そんなものではなく、いまやまさしく文明間の折り合わない断層の戦争、

フォルト・ライン (Fault line) ウォーだと言っております。思想・宗教のずれの断層であり、断層戦争そのものだと言うわけです。これらの点については猪木先生からまた教えていただかないといけないのですが。

だいたいアフガニスタンあたりでも、かつてソ連が攻め込んだときには、アメリカはビンラディンを声援し、義勇兵などが戦ったため、ソ連は敗退して逃げ出したわけです。もうそのときから断層戦争にアメリカは加わっていたわけで、今回のことが起こったからといって、何もそれが同時多発テロだと簡単に言えない歴史的事実があります。私自身は、いま起こっていることは、やはり断層戦争なのではないかと思っております。

そういうものに対して、どう対処すべきかという問題は非常に難しいことはわかりますが、結局、自分の文明というのは自ずと明らかという、自明性を非常に強く持ったものでありますから、自分が絶対に正しいと信じ込んでいること、それを何とか相対化するより手はないのではないかと。他の、特に一神教の宗教の間では、自明性がそれぞれきわめて高いから非常に激しい争いが起きるわけです。この点に関して梅原先生は、もう少し仏教なり神道なりの立場というものを世界宗教として扱わないと、こういう問題は解決しないとおっしゃっているわけです。その通りだろうと思うんですけども、そう簡単に、だからといって仏教をお願いしますと言っても、話は通じないわけです。

しかし、この間、ベルリンの映画祭で宮崎駿監督の『千と千寿の神隠し』というアニメ映画が上映されて、最高の賞を取ったわけですが、それなども多神教的な世界のファンタジーであったわけです。それからいま小学生が夢中になっているハリーポッター少年が、お城で魔法使いの修業をするなどというようなものも、何かそれに近いものであります。

むしろそういった、誰でも受け止められるような事柄において、寛容な精神を養って行くということが、これからの文明の衝突を緩和して行くのではないだろうか。そういうふうに、パラダイムシフトの問題は非常に難しいわけですが、何とか真剣に考えて行かなければならないだろうと思っております。

## 討議

○高畑 どうもありがとうございました。

○西谷 以前から先生の本を勉強させていただいて、大変感銘を受けているのですが、一つだけお聴きしたいと思っていましたのは、この間人主義というのは非常に興味深いことなのですが、この言葉に先生の価値判断というのを込められておられるのかどうかです。つまり、いまの日本の現実を見て何が問題なのかということをも単純化して言いますと、一方では人々があまりにもエゴイスティックになって、社会のこととか、他人のことを考えないものであるという見方があると思うんですけど、他方で、そうではなくて、人々がほんとうに自立して、自分の頭で物事を考えようとしなくて、世の中に流されているということ自体が問題だと、そういうような見方があると思うんです。そういうこととの関わりで

間人主義という見方の中身、先生の価値判断が込められているのかどうかという、これをちょっとお伺いしたいのですが。

○濱口 私は個人的には、間人主義のほうが人間存在として好ましいことだとは思っておりますけれども、しかしべつにそれを証明するために何かをやっているわけではありません。先ほど申したように調査してみますと、8000 人もの人たちの大半が、そちらのほうをサポートしているので、これは多少、将来に対する見通しは明るいなと思うだけの話であって、べつに価値判断をどうのこうのということではありません。むしろ客観的に見ているつもりです。

○西谷 そうすると、たとえば自分の頭で考えないのが問題で、もっと個人が自立しなければならぬという、そういう考え方については先生はどうですか。

○濱口 それは、一番最初に言ったような、近代化の問題とからんでいまして、自分自身の行動を自律的にコントロールしなければ、そういう近代化は達成できなかったわけですね。資本主義の発展ということも、まさしくそういうことだったであろうと思います。そういう近代化というものが、いわゆる文明国において達成されていますので、もはやそういう発想が必要でなくなってきたのではないだろうかなど。

○西谷 日本でもそうですか。

○濱口 はい、日本も含めて。欧米のほうでは、人間関係を、これから重視しないといけないという意識をし出したのではないかと思っています。

○佐藤 最後に言われた、文化の役割というか、サイエンスとの比喻に、さきほど挙げられたような意味での文化ですね。そういうものと、梅原先生の言われたムツゴロウの事情と、ああいう、いわゆる文化的なものの影響というのは、やはり、物理学を教えるとか何とかと違って、もの凄い浸透性もあるわけですね。だから元々、ある意味で、ナチュラル・フィロソフィーと言っていたときは、ある種の文化、世の中の見方みたいな感じのところには何か発言していたのが、自然科学であった。ものをつくるのに応用するのだから正確でなくてはいけないとか、何か脅迫観念のようなものが出てきて、トータルに物語的に語る部分というのが非常に減って、ナチュラル・フィロソフィーから個別の科学になってきた。

科学というものの、これは先生に聴くというよりは、むしろ僕が受けている印象ですが、ある種、物語ではあってはいけないような、そういうことが僕は問題ではないかと思う。文化としての科学というのを、ずいぶん昔に書いたことがあります。もっとそういう意味での浸透性、そういう役割をもっとしなくてはいけないのではないかと思っています。

○濱口 それはまったく私も同感です。いままでの自然科学が特にそうだったと思うんですが、法則性というものを見つけ出すことが端的な研究という、何か至上命令のようなものがあつたのではないかと思います。

しかし現実には、そんなクリアカットな法則性が出てくるはずがありませんから、現実はずっと、文化的な要因を含めて複雑にからんでいるわけですね。それを最近では複雑系論というような形で、何とか科学的な装いの下で説明しようという動きが強くなっているの

はないか。複雑系論というのもおもしろいですが、実は何も言っていないに等しいのだと思います。

○佐藤 けれども、ひとつのものの見方の、ある種の何か新しいベクトルを与えているというような意味では、やはり文化的には影響があるんですね。

○濱口 意義はありますね。

○佐藤 それを、僕などはむしろ物理の中では、そんなことは何の意味もないと言っているんですけども。だけど広い世間から見たら、ものの見方の新しいフレームを与えるということ。

○濱口 それは、私などがやっている社会学の領域でも、複雑系論が最近、非常に盛んです。猪木先生もご承知のように、経済学では非常に盛んですよ。

○猪木 いや、どうかな。

○佐藤 そのような感じとちょっとずれると思うので、いっぺん対峙しないといけないみたいなんだけど。ほんとうは。

○廣田 何か複雑系論とか、そういう言葉は使わないで、もっと別なアプローチの仕方があるんじゃないかという感じがするんですね。

○佐藤 言葉がいいんだよ、やっぱり。

○廣田 何となくごまかされているという感じがしますね。

○佐藤 だから、ごまかされて幸せだ。それでもいいから何とかとあるんじゃないの。

○廣田 科学自身も、ひとつのものの見方でしかないの、だけどいままでは絶対的な、それに反抗することは簡単にできないような印象を、みんな持っているわけでしょう。やはりそれもひとつのものの見方でしかないの、もっと別のいろいろな見方があるのではないかということが、どうしても今後、出てこない。

○濱口 実際に、社会事象の中では複雑系論的なアプローチというのは有効な場合もあるんですね。たとえば1つの例を挙げますと、高速道路をみんながスピードを出して走っている場面を考えてみます。あるとき私の前の車の後部のとびらに、「私は法定速度で走ります」と、大きく書いて走っていた車がいたわけです。80キロで走られたら、かえって事故を起こすわけですね。みんな複雑系的に受け止めれば、何の秩序もないんですけども、それ以上のスピードで適当に車間距離を開けて走っている。そのほうがかえって秩序性があるんですね。そういうふうに、複雑系と言っても、それをどう受け止めるかによって、いろいろな意味が違ってくるのではないかという気がいたします。

○佐藤 理論というのは見せ物だと思うんですね、僕は。だからときどき気象予報などで、だんだん大きなコードをつくるようになる。しかしそれで何をやったか分からない。そのわりには計算結果などより自然を見ていたほうが、きちんと計算しているのかなという。そうすると、ある種の単純性を持った見せ物ですよ。必要なのは。

和辻の『歌舞伎と操り浄瑠璃』というのに書いてあるが、人々が惹き付けられるものというのは、必ずしも現実に近いものではない。人形にこそ、ぐっと惹き付けられる。そう

いう要素もあるのかな思い始めているんですね。

○高畑 ちょっと時間がないのでこのへんで。どうもありがとうございました。それでは猪木先生をお願いします。

#### 猪木武徳先生の講演

○猪木 簡単に2～3点、今日のみなさんのお話を伺いながら感じたことを申し上げます。

まず第1点は、経済学では合理的個人というものを仮定して、その合理的個人がある制約の下である目的達成に向け最適化するときに、どういう個人的な均衡解が得られるのか、それを社会全体で集計するとどうなるかという、論法を使うわけです。理論経済学の人々が一般的にモデル分析と称して用いる手法です。濱口先生のお話の最後のところが出た点、あるいは先ほどの佐藤先生のお話とも関係するのですが、人を惹き付けるといいますか、モデルよりストーリーが大事なのではないかということを書き始めている人たちがこの10年ぐらい、現われています。

それはどういう意味かと言いますと、たとえば大学院生が、ある仮説を統計的に推定、検定して論文を書く。持ってきた論文は、もうほとんどが全部、計算機がやってくれた仕事ですね。最終的に結論、政策的含意と書いてありますけれども、so what ?と言いますか、それはあなたの頭の一部が外に流れ出したようなかたちの計算機がやってくれた仕事ではないか。その問題になぜ関心を持って、最終的に何を主張したいのか。それがほとんど分からないような論文が増えてきました。ストーリーはほんとうに何なのだという意味で、同業者の間で魅力のある論文が激減したというのが、このおそらく10年、20年ぐらいの現象だと思うんです。

実はこの問題は同業者が、どのような若い人たちを育てあげてきたのか、という点に関係すると思うんです。我々はよく、こんな狭い小さな問題だとか、これは人の考えと同じではないかとか、ストーリーがないとか、冒頭に私が申しあげたような批判をするんですけども、若い人にとって、自分の力を評価される、評価されて食べて行くための仕事を得なくてはならない。そういうシステム自体が、どこの社会の中でも特に現代の産業社会において動いているわけですね。

そういうときに若い人が、一生かかっても解けないかもしれないような問題をやるとか、いつその成果が上がるか分からないということに関して、取り組みにくいということがあ

るわけです。

12、13年前に国際交流基金から頼まれて、いま東大におられる北岡伸一さんと2人で、アメリカにおける日本研究の現状を調べてくれと言われ、2週間、2回かけて北から南、東から西を全部歩き回って、およそ日本研究者と自称、ないしは他の人からそう言われている人にインタビューをしたんですね。そのときに私が非常におもしろい現象だと思ったことは、実はいま言った問題な